



誰もが安心して楽しく暮らせる社会へ

前田淳さん NPO 法人アザーボイス代表理事

プロフィール：1954年兵庫県生まれ。

中学1年生から高校卒業まで杉並区で生活。その後1983年より現在まで成田西に在住。

1984年に杉並区内でマーケティング会社を起業後、地域開発のコンサルタントを経て、2002年に友人や色々な職業の仕事仲間とともにNPO法人アザーボイスを設立、気がついたら代表として現在に至る。

NPO 法人アザーボイスWebサイト：<http://ovjp.org/>

バリアフリーマップ杉並「いってきまっぷ」：<http://i-map.jp/imaptoha.php>

バリアフリーマップ杉並「いってきまっぷ」駅情報：<http://i-map.jp/station/>

■計画だけでなく、現場に近い仕事がしたい



▲アザーボイスのロゴマーク

杉並区民であれば、区内の障がい者団体などが使いやすい施設やお店を紹介する“バリアフリーマップ杉並「いってきまっぷ」”の存在を知っている人も少なくないだろう。2000(平成12)年3月に杉並区で作成された「いってきまっぷ」は、玄関や入口の形態、エレベーターやエスカレーター、トイレの種類など、各施設やお店の設備状況が細かく掲載された印刷物(CD-ROM版もあり)である。作成にあたっては、区内の障がい者団体などに使いやすいお店の紹介を依頼し、できるだけ多くの情報を集めるため、杉並区内の店舗や事業所に約1万枚の応募用紙を配布した。

印刷物やCD-ROMになり、いったん区切りがついた“バリアフリーマップ杉並「いってきまっぷ」”だったが、2年後の2002(平成14)年になって、杉並区ではWeb化して運営しようという話が持ち上がる。その際、協働先として選ばれたのが「アザーボイス」だった。

「福祉関連の活動内容で、杉並区内に本拠地を持つNPO法人にいくつか声を掛けていたようですが、うちはたまたまシステムエン

ジニアやデザイナーもメンバーの中にいたので、依頼を受けることができました」

アザーボイスがNPO法人として設立されたのは、2002(平成14)年3月。前田さんは、行政コンサルタントとして、1996(平成8)年から2000(平成12)年にかけて福祉関連の仕事を数多く手掛けていた。

「ちょうど障害者計画や子育て支援計画など福祉関連の計画策定が進められていた時期だったのと、2000(平成12)年から施行された介護保険事業計画の策定で、どこの市区町村もバタバタでした。ただ、僕は福祉関連の専門家じゃなかったもので、脳神経外科専門医の幼なじみにレクチャーを受けたり、彼と同じ病院で働く医療社会福祉士を紹介してもらったりもして。幼なじみの彼自身も、手術から治療、家庭でのリハビリといった一連の流れで、医療と福祉の連携に関心を持っていたんです」

2000(平成12)年に、担当していた各市区町村の介護保険の事業計画策定が終わり、一息ついたときに、誰かが「組織をつくろう」と言い出した。

「計画って、あくまでも計画なんです。それをつくるのはいいんだけど、その後はどうなっちゃうんだろうねって話になった。計画だけじゃなくて、もっと現場に近い仕事ができたらいいよねって。当時、“保健・医療・福祉の連携”という言い方がキーワードとしてあって、それを実際の現場にどう組み込んでいけばいいのかを、脳神経外科専門医の幼なじみも日々悩んでいたんです。“保健・医療・福祉の連携”が実践して、モデルケースをつくるような組織を立ち上げれば面白いんじゃないかっていうことになって、アザーボ

イスが設立されました」

“思い”としてはやりたいことはたくさんあったが、いざNPO法人を立ち上げたものの、さて何をしようかと考えあぐねていたときにきた依頼が、“バリアフリーマップ杉並「いってきまっぷ」”のWeb化だった。

「当時関わっていたエンジニアに話を聞くと、システムづくりはとても大変だったようです。Web化するにあたっては、「盲導犬・介助犬の入店可否」、「掲載時期の表示」、「区民が情報提供できる機能」を新たに追加して、印刷物に掲載されていた施設やお店を再調査しました。みんなで苦労して作ってWeb上に公開した後、ある障がいを持っている方から、『絶賛です』と言ってもらえたときは本当に嬉しかった。サイトの内容がどうこうというよりも、行政や福祉の専門家ではない民間の人がこういう仕事に目を向けて、受けてくれる時代になったことをその方は喜んでいました」

現在、“バリアフリーマップ杉並「いってきまっぷ」”はver.2が公開されている。2006年には、新たな展開を視野に入れながらver.3を準備中だそう。

■みんなと同じテーブルで 同じように食事をする喜び



▲思いが実現したユニバーサルデザインのスプーン

「“バリアフリーマップ杉並「いってきまっぷ」ver.1が作り終わる前後くらいから、ユニバーサルデザインの勉強会を始めました。その関係で、スタッフのひとりが福島県にある老人保健施設「小名浜ときわ苑」を訪ねたんです。そこで出会ったのが、半身マヒとなった70代の男性のために介護スタッフが手作りしたスプーンでした」

脳梗塞が原因で半身マヒになってしまった70代の男性にとって、“自分で食事ができる”ことは何よりも喜びであり、自尊心を保てる唯一の行為だったという。

「その男性は、自分でうまく食事ができないと、感情的に不安定になってしまうんです。見かねた施設の介護スタッフが、その男性が使いやすいように市販のステンレスのスプーンを加工して、食事に支障がでないように工夫をしていました。ただ、うちのスタッフが見たときには、もう随分古くなっていて“スプーン”というよりは“大工道具”といった感じだったそうです」

その老朽化したスプーンで食事をする男性を見たアザーボイスのスタッフは、「何とかより快適で、楽しく、美しく食事ができるスプーンを作れないだろうか」と考えたという。介護スタッフが手作りしたスプーンを撮影し、知人が勤めているシチズン・アクティブ株式会社（東京都西東京市）の食空間事業部へ足を運び、そのアイデアを伝え、新製品開発の可能性を打診した。

「最初は、やっぱり難しいだろうと。シチズン・アクティブ株式会社には、当時すでに「ユニバーサル・デザイン・チタンカトラリー」という軽度の障がいを持つ人向けのシリーズがありました。実際、半身マヒなどの重度の障がいを持つ人向けの商品開発は、どのくらい需要があるのか読めないところがあったんです」

しかし、ある日アザーボイスのスタッフのもとに相談した知人が訪れ、こんな感じのスプーンはどうだろうとサンプルを持ってきてくれる。それを「小名浜ときわ苑」へ持ち込み、製品化までのテストやモニタリングへの協力をお願いした。

「結果として、開発元のシチズン・アクティブ株式会社と老人保健施設「小名浜ときわ苑」、製造元の株式会社サクライなど、この製品が完成するまでには、たくさんの人に関わっていただきました。アザーボイスは、企業と施設をつなぐ“通訳”みたいな働きをしたように思います。ものづくりのプロたちのこだわりを持った仕事には、頭が下がりましたし、施設の介護スタッフたちの熱意にも圧倒されました」

2004（平成16）年4月には、財団法人テクノエイド協会の助成事業として承認され、正式に製品化に向けた開発がスタート。そして、アザーボイスがもともになるスプーンと出会ってからおよそ2年後の2005（平成17）年10月、ついに製品化される。たくさんの人の力を得てつくられたそのスプーンは、「手のひらスプーン」と名付けられた。誰もが使いやすいだけでなく、スプーン自体が“素敵”であり、それを持って食べている姿も何か特別な食事自助具を使っているようには見えない。「より快適で、楽しく、美しく食事ができるスプーンを」——最初の願いが、そのまま形となっている。

いざ施設をつくることになって、どんな場所で、何をしようかと悩んだ時期もあったようだ。「作業所の帰りにまた仕事するのは誰でも嫌ですよ。とはいえ、何の目的も設定しなくて大丈夫なのかなと。でも、結論を言ってしまうと何にもなくてもみんなここに来るだけで楽しいらしいんですよ。彼らからすると、障がいを持っていない人で障がい者施設のスタッフでもない人と普通に話すという機会があまりない。何をやるわけでもなく、みんなでここへきてアザーボイスのスタッフや仲間たちと2時間ワーワーしゃべったり、遊んだりする。それだけで楽しくて、毎週心待ちにしているそうです」

■障がいを持つ人たちが、 日常的に立ち寄れる場所を



▲誰もが安心して楽しく暮らせる社会を目指し活動は続く

2005年11月にオープンした杉並区障がい者まちなか生活支援事業・拠点施設「ブルーラ」は、杉並区と一緒に進めているアザーボイスの新しい活動のひとつだ。JR西荻窪の駅から徒歩5分ほどの場所にあり、一見ただの事務所のようにもカフェのようにも見える。

「障がいを持つ人たちが、作業所と施設との往復の間に息抜きできる場所をつくらうというのが「ブルーラ」のコンセプトです。もちろんその他の障がい者施設で、土日のイベントなどは行なわれているけれど、もっと日常レベルで立ち寄れる場所をつくりたいと思いました。究極は、どこへでも気軽に行けるのが一番いいんですけどね」

「作業所の帰りにまた仕事するのは誰でも嫌ですよ。とはいえ、何の目的も設定しなくて大丈夫なのかなと。でも、結論を言ってしまうと何にもなくてもみんなここに来るだけで楽しいらしいんですよ。彼らからすると、障がいを持っていない人で障がい者施設のスタッフでもない人と普通に話すという機会があまりない。何をやるわけでもなく、みんなでここへきてアザーボイスのスタッフや仲間たちと2時間ワーワーしゃべったり、遊んだりする。それだけで楽しくて、毎週心待ちにしているそうです」

現在は、毎週水曜日の16時から18時30分までの時間しか施設の開放をしていないが、今後は週末や他の曜日などにも増やしていく予定だ。

「まだ恥ずかしいから言えないですけど、手探りで始めた『ブルーラ』の活動ですが、

＼

少しづつ次のステップが見えてきました。ただ、すぐにスピード感のある華々しい実績というのは難しいと思っていますし、区の方々もそれを理解してくれて、長い目で見てくれています」

当初この場所に集まっていた障がいを持つ人たちは、みんな就職が決まり、『ブルーラ』が開いている時間帯に來れなくなってしまった。そのため、準備を進めていたインターネットラジオ「まちなかラジオ杉並」の公開にはもう少し時間がかかりそうだ。

「ある人は、なかなか來れなくなるからと言って、折り紙をいっぱい折って持ってきてくれました。僕らも寂しくはなるけれど、就職が決まった人たちは、本当によかったなと思います。でも、既存の職業にはどうしても適合できない障がいを持つ人だっただくさんいます。仕事がないんだったら自分で作っていくしかない。単調な作業場の仕事だけじゃなく、もっとクリエイティブなこともして、あわよくばお小遣いにもなるような活動を、

ここに来る人たちと一緒にできればいいなと思っています」

杉並区障害者まちなか生活支援事業・拠点施設「ブルーラ」は、杉並区とNPO法人の協働事業というはじめての試みだ。「こういった場所が、今後もっと増えていけばいい」と前田さんは願っているという。

2005(平成17)年12月、“バリアフリーマップ杉並「いってきまっぷ」”や「手のひらスプーン」、杉並区障害者まちなか生活支援事業・拠点施設「ブルーラ」など、数々の新たな福祉のモデルケースを作ってきた功績から、「福祉のまちづくり功労者都知事感謝状」を受賞したアザーボイス。誰もが安心して楽しく暮らせる社会へ――前田さんの屈託ない笑顔の先に、理想の未来が見えたような気がした。

(文：佐竹未希)